「真実を語った」　　2017年11月16日

コリントの信徒への手紙 二7章13節b～16節　この慰めに加えて、テトスの喜ぶさまを見て、わたしたちはいっそう喜びました。彼の心があなたがた一同のお陰で元気づけられたからです。わたしはあなたがたのことをテトスに少し誇りましたが、そのことで恥をかかずに済みました。それどころか、わたしたちはあなたがたにすべて真実を語ったように、テトスの前で誇ったことも真実となったのです。テトスは、あなたがた一同が従順で、どんなに恐れおののいて歓迎してくれたかを思い起こして、ますますあなたがたに心を寄せています。わたしは、すべての点であなたがたを信頼できることを喜んでいます。

パウロはコリント教会のある人々から誤解を受け、非難された。誤解を解こうと「涙の手紙」を書き送ったが、手紙がどのように受け取られたかを案じていた。そこへ、テトスが戻って来て、彼らは、パウロの手紙によって、悔い改めを促され、パウロの誠実と熱心を受け入れたという嬉しい報告を受けた。パウロは「わたしはあなたがたに厚い信頼を寄せており、あなたがたについて大いに誇っています。わたしは慰めに満たされており、どんな苦難のうちにあっても喜びに満ちあふれています」と書いている。コリント教会への愛と信頼が彼らの心を開き、和解の慰めを生み出したのである。

パウロは続いて、「この慰めに加えて、テトスの喜ぶさまを見て、わたしたちはいっそう喜びました。彼の心があなたがた一同のお陰で元気づけられたからです」と書いている。パウロ自身が慰められただけでなく、テトスの喜びを見て、私たちも一層の喜びに満たされた。テトスはコリント教会が悔い改めて、立ち直ったことで心が元気づけられたからである。パウロとテトスは一心同体であったことが分かる。テトスはパウロの宣教活動を支える強力な助手として働いた人である。

紀元48年に行われた「エルサレムの使徒会議」は最初の教会会議で、エルサレム教会と異邦人教会の間で、激論の末、一致して、主イエスを信じる信仰によって、救われるという信仰告白に達した。この信仰理解がユダヤ教という限られた宗教から、キリスト教という世界の宗教へと展開したのである。エルサレム使徒会議は極めて重大な会議であった。この会議でのことを、パウロは、ガラテヤ書2章3節で「しかし、わたしと同行したテトスでさえ、ギリシア人であったのに、割礼を受けることを強制されませんでした」と書いている。律法や割礼に関わりなく、主イエスへの信仰によって、神に義とされる教理が確定したのである。教会の方向を決定する大事な会議に、パウロはテトスを同行させている訳で、いかにテトスを信頼していたかが分かる。

パウロは、テトスにコリント教会に愛と信頼をよせていると誇らしく語ったが、その通りになり、恥をかかずに済んだ。それ以上に、パウロがコリント教会で真実を語ったように、テトスの前でもコリント教会を誇ったことが真実となった。パウロとテトスは慰めを共有し、パウロが語った真実が実現したことを、何よりの喜びとしている。テトスは、コリント教会が恐れおののいて歓迎してくれ、パウロに対して、一同が従順な思いを表したことで、コリント教会に篤い心を寄せている。パウロは、「わたしは、すべての点であなたがたを信頼できることを喜んでいます」と喜びを伝えている。

教会も人が集まる所なので、誤解や諍いが起こる。しかし、キリストの霊が働き、福音にふさわしいものへと導いてくださる。「教会を信ず」とは、このことである。